



長崎県高等学校長協会会長

寺田隆士

Terada Takashi

昭和二十二年生まれの私は、この春に定年を迎える団塊世代の一人です。先日、団塊を「だんこん」と発音した女子大学生がいると聞いて赤面しました。この国の若者の知的レベルに赤面したのです。

けなげに「わが実存」の有り様を考えながら生きてきた私たちにとって、名付け親から大量規格品のごとく十把一絡げにされることに抵抗があるのですが、団塊世代と呼ばれることにはもう慣れました。私たちはこれから「こ隠居さん」の仲間入りすることになります。この時に当たって、私には世代の使命としての隠居仕事があると考えています。職業から、隠居する前に説教口調になってしまうのですが、「いいたか放題」ということでお許しください。最近、電車の中で大学生と思しき若者がケータイと睨めっこする姿は見て、読書する姿を見かけなくなりました。そこで言いたいの「大学生は本を携帯しな

い」ということです。

京都大学名誉教授の竹内洋氏が書いた『教養主義の没落』という新書があります。人格形成や社会改良のための読書が学生、生徒の規範文化であった教養主義は、大正時代に興り、一九七〇年前後に大衆化してピークに達したが、その頃を境にして急激に没落したと指摘しています。教養主義の興隆から没落に至る過程を解析した本です。私は、自らの知性と感性を磨き、倫理観を形成するために多くの本を読むことは、教養主義と呼ばずとも、洋の東西を問わず人類普遍の文化であると考えます。わが国では、旧制高校や旧制中学校の規範文化となる以前、すでに江戸時代の藩校や寺子屋の理念として存在しました。だから三〇〇年以上の年月をかけて築き上げられてきたものです。その教養主義没落のきっかけをつくってしまった世代こそ私たちなのです。

# が携帯すべきは イではなくて書物

団塊の世代から自責の念と愛を込めて

私たちは、テレビとともに成長し、かつては「テレビ世代」と言われていました。読書離れの1期生です。しかし、本は読まなければならないという確かな規範が意識にありました。試験前に猛烈に読書への欲求が高まり、試験が終わった途端になぜかその思いが消えてしまうのを繰り返した高校時代の思い出があります。教員に成りたての頃、その話をすると「私も」と言う生徒は多かったのですが、今は「別に？」です。

私は、大学入学に際して、古今の名著を読み尽くすぞという意気込みで臨みました。格好の全集出版が始まりました。小豆色の装丁の『世界の名著』です。竹内洋氏が言う大衆教養主義の絶頂期であったのだと思います。ところが同じ頃、若い世代の旗手と目された詩人が「書を捨てて街に出よう」というスローガンを掲げたのです。私は出鼻をくじかれました。でも、「俺にはまだ捨てる本がない」と街には出ませんでした。しかし、このスローガンの影響は大きかったように思います。社会改良のために街中へという呼びかけは、続く世代にはレジャーのために街中へとなり、やがては街中とキャンパスの境がはずれてレジャーランドと化した大学もあるようです。私の世代が大きな転換点で

した。そこで、私たちの世代の責任において教養の復興を言わなければならないと思うのです。

当然ながら、本を読まなければならないという規範は、中学生、高校生時代に植え付けなければなりません。「自ら考え判断する力」の育成が言われていますが、振り返って、私が最もよく自ら考え判断しようとしたのは本と対話している時だったからです。文武両道を唱える高等学校は多くあります。その意味を「学習と部活動の両立」ではなく、今は敢えて「学習と読書と部活動の鼎立」と言い直す必要を感じています。

# 大学生 ケータイ

## ●プロフィール

寺田隆士(てらだたかし)

1947年生まれ。島原市出身。1970年東京大学文学部卒業後、長崎県の高校教員となる。専門科目は倫理と日本史。五島南高校、口加高校を経て県教育委員会に勤務。その後諫早高校教頭、県教育委員会、島原高校校長、県教育センター所長を歴任し、2003年から長崎東高校校長。現在、県下初の公立中高一貫教育に取り組んでいる。

2005年4月から長崎県高等学校長協会会長

2006年4月から長崎大学経営協議会委員

